

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私（1）

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

1. 新入生

私は1966年4月に京都大学理学部に入学した。入学式の日だったかその翌日だったか、教務の説明会がE号館（現在の吉田南4号館）の一室で開かれた。その年の4月はとても寒かったが、すでにストーブはかたづけられていた。20歳前の若者が360人集まっても部屋はしんと冷えていた。説明に小堀憲先生が入室するや、「教授が部屋に入ってきているのに学生がオーバーコートを着たままでいるとは何事か！」と一喝された。われわれはもともとオーバーコートを脱いで小堀先生の話聞いた。大学とはやかましいところだな、というのが入学第一印象であった。小堀先生は「君たちが研究者になりたかったら、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語くらいは読み書き聞き話すことができるようにならなければならない。」とおっしゃった。これは私にとって地獄を予感させる恐怖の宣告であった。私は外国語が苦手で、英語にさえ手こずっていたからである。（言い訳するわけではないが、国語や古文、ことに漢文は大好きで得意でもあった。）入学早々、暗い気持ちになった。

ここで、1966年頃の大学を取り巻く環境に触れておこう。60年安保は余韻も消えていたが、まだ「戦後」が所々に残っていた。例えば、生協には「米穀通帳を持ってこられる学生は生協に預けて下さい。卒業時にお返します。」という貼り紙が出ていた。自由流通米も出回り始めていたが、米穀通帳を持って米屋に行って配給米を買うと自由流通米の半値くらいで買えた（らしい）。私も米穀通帳を提供したが、卒業する頃には米穀通帳無しでいくらでも米が買えるようになっていて、米穀通帳を返してもらうことすら思いつかなかった。

九州宮崎の田舎者が京都大学の理学部に入ったのはなぜかと問われたら、建前としては「湯川先生の下で理論物理学を勉強したいから」と答えていたが、理論物理がどんなものかも知らず、また、専門に進学したときに湯川先生はすでに定年退官していることなども知らなかったから、いい加減なものであった。実は、高校2年生の時に姉が京都旅行に連れてきてくれて、いっぺんに京都が気に入って京都大学を希望するようになった。もとより、東京には行ったことがなかったので、例えば東京大学でなく京都大学だ、というには根拠薄弱であった。京都大学を選んだ理由は、実は当時の入試のあり方であった。先に触れたように、私は国語が得意で英語が苦手であった。したがって、入試の配点が国語に厚く英語に薄い大学が望ましい。京都大学は理系文系を問わず英数国理社200点ずつの1000点満点で、このような大学は他にはなかった。旺文社の全国模試の結果によると京都大学には75%の合格確率が出るが、国語に極めて冷淡な東工大では25%、国語が入試科目にない早稲田理工学部でも50%であった。京都大学を受けないという選択肢はなかった。75%もあれば一浪すれば確実に受かる、と思って楽観していた。

さて、入学時に戻ろう。一番困ったのは「第二外国語に何を選ぶか」であった。いずれ、3カ国語全てに堪能にならなければならないとしても、単位を取らないと卒業で

きない必修科目の第二外国語には頭を痛めた。そこへ、田舎の高校の常として、高校の先輩が現れて「松本、ドイツ語が一番単位を取りやすいからドイツ語にしろ」と言う。一も二もない。単位が取りやすいことより大切なことはない、とドイツ語にして3組に入れられた。

1, 2回生の講義では、理学部から教えに来る先生の授業が面白かった。1回生の時は、化学Bが理学部から来る先生であった。将来必要になるから、と英語の教科書であった。その化学の直前に物理Bの授業があったが、全く教科書通りでおもしろくない。サボって化学の教科書の苦手な英語に訳をつけることにした。物理の期末試験の時に、一問、教科書に無い話題のものがあって、授業は途中から教科書を離れていったことを知った。60点あれば合格というありがたい制度に救われて単位は取った。教養課程の2年間で、落とした単位は、よせばいいのに取った第三外国語のロシア語だけであった。ロシア語とは発音も文字も文法も相性が悪く、1ヶ月で投げてしまった。それ以外はすべて単位を取った。だからと言って、分かっていたわけではない。特に数学はもやもやと分かったような分からないような、それでも何となくそこそこ問題は解ける、という、摩訶不思議な状態を漂っていた。それなのに、数学が好きであった。

数学Bは、当時は教養科目（「B」）の付く科目は教養科目で選択、「C」が付く科目が専門科目で必修）であったが、必ず履修するように指導されていた。平井先生が理学部から来て担当して下さった。興に任せて教科書を逸脱し、好き勝手に涉獵する。これは面白い。入学3ヶ月目にして「湯川先生の理論物理学」は私の頭から消え失せて「数学科に行く」と決めた。こういうとき、学科ごとでなく理学部として入学していることはやりやすい。まだ分属していないから、志望分野を変えても転学科の試験も手続きも要らない。

理系の科目では、実験科目も好きであった。化学実験では「試薬Aを薬品Bに、試薬Cを薬品Dに混ぜろ」という指示があると、必ず「AをDに、CをBに混ぜてみた。もちろん、時として小爆発が起こったりして助手の人が飛んできてこっぴどくしかられた。要らんことをしているから時間のロスが多く、レポートを書くのはいつも午後8時頃であった。私の頭上の明かり以外はすべて消されたり、嫌がらせをされた。担当の助手にとっては、午後7時には帰れるはずだったのに、馬鹿な学生の所為で夜の9時頃まで実験室に貼り付けられることになってしまったのである。今となっては申し訳ないことだと理解できる。地学実験ではD号館（今の吉田南2号館）を測量して平面図を提出したら、「D号館は長方形だよ、これは平行四辺形じゃないか」としかられた。受け取ってもらえて単位ももらった。

2. 2回生、分属試験

2回生になると、数学C1を吉沢先生が担当して下さった。2時限目の講義で、10時から11時50分まで（当時は110分授業）のはずであるが、先生が現れるのは11時20分か30分くらいで、「やあ、まだいましたか」というのが決まり文句であった。背広の右ポケットから裸のチョークをバラバラと教壇の上に取り出し、左ポケットから本来ならば三角形に組み立てられるはずだが壊れてだらっと伸びてしまう簡易置き時計を取り出して授業が始まる。授業終了時刻などは意に介せず、12時半過ぎまで授業をして帰られる。この日の3時限目に授業がある学生は昼飯を抜くか、3時限目をサボるかという選択を迫られた。授業はヒルベルト空間である。4月の終わり頃になると「君たち、授業が分かっていないようですね、何が分かりませんか？」と言われた。「フーリエ級数というのが分かりません」と言うと、「ではフーリエ級数からやりましょう」ということになった。ところが、5月末くらいに「君たち、授業が分かっていないようですね、何が分かりませんか？」とまた言われた。「級数が分かりません」と言うと、さすが

にムッとされたようで、「数学Bは誰に習ったのですか？」と問われた。「平井先生です」と答えると黙ってしまわれた。そして6月からは級数を講ずることとなった。それでも、普通の級数を講ずる吉沢先生ではない。前期末試験の問題は「添字集合が非可算の場合の級数において条件収束、絶対収束はそれぞれ定義できるか？」であった。

ところが、10月始めになると「吉沢先生が病気のために休講」の告示があつてからいっこうに授業が再開されない。11月末になって「次週から講義を再開」の掲示があつたが、次週の講義の直前に「休講」の貼り紙が出て、それ以後は音沙汰無し。聞くところによると、神経性心臓病とのことであった。どのような病気なのであろうかと噂をしていると、どこかから情報を得る者がいて、「心臓が痛むのだが、医者は何も異常がないと言うそうだ」とのこと。よく分からなかった。毎年秋になると発病する季節性のものとのことであった。

年が明けると「吉沢教授に代わって池辺助教授が講義を再開します」との貼り紙が出た。確かに池辺先生が来られたが「3回の講義で多重積分とベクトル解析を終わります。証明はしません。使えればよいのです。」とのこと。本当に3回で全て終わった。期末試験の最中に「プラスマイナスくらいは違っていても構いませんよ。」とおっしゃる。数学とは厳密な学問だと思っていた私たちはかえって困惑した。

2回生の秋になると分属問題が生じてきた。毎年同じようなことを繰り返しているようだが、この年も数学科を希望する学生が定員より10名ほど多かった。だから分属試験をすることは当然のように思えるが、そうではない。教養には留年生がかなりたまつていて、それを入れると定員の1.2倍くらいの学生に分属をすることになる。理学部の方針として、学科を選ばなければどこかに分属できるように制度を運用することになっていて、数学科は50人の定員なのだが60人ほど引き受けることになるのだそう。そうすると数学科の場合、修正定員より分属希望者が1名だけ多いという状況なのだそう。10名ならともかく、1名くらいならば落とさずに入れてしまっても困ることはあるまい、ということになり、連絡をつける者がいて、その旨をその年の数学科主任の永田先生に頼みに行こうということになった。知らないところでことが決まるのが嫌いな性質なので私もついていった。学生の希望通りに定員を超えて入れてしまうと、不人気学科に学生が来ないことになり、実験に差し障りが出るから修正定員よりも多く取ることはたとえ1人でもできない、との永田先生の回答であった。分属試験の結果、たった1人を落とすには忍びなかったのか、2名の不合格が発表された。

[付録1 入学試験問題]

私が受験生の時にも赤い表紙の過去問集があつて京都大学の入試過去問を解いたはずだが、それは記憶に残っていない。しかし、自分が受けた入試問題はかなり覚えている。

数学では「煙突が3本ある。そのうち2本の頂上が重なって見える点が3点ある。この3点が1直線上にあることを証明せよ」という問題が記憶にある。入試が終わると正門の前で予備校の関係者が解答集を配っている。それによるとメラニウスの定理を使って解く、などと書いてある。考えている3点は、(1直線上にない)煙突の頂点3点が定める平面と目の高さの平面の交線上にある、で証明終わり、としていた私はちょっと不安になった。

国語の問題では、土井晩翠の荒城の月の一番「春高樓の華の宴…」二番「秋陣營の夜半の月…」につづく三番を、「夏または冬の情景を踏まえて、語調を同じにして創れ」というものであった。語調は七五調だからこれに合わせる。夏か冬かでは、夏のだるい気分より冬の引き締まった気分の方が効果的であろう、と決めた。

天守に積もる 雪白く 三年の戦 まだ止まず
垣圀に残る 矢玉痕 つわもの共が 夢去りぬ

どこかで聞いたような、と思われる方もいるだろうが、制限時間内で突然詩を作れ、といわれて蕩々と湧いてくるものではない。いろいろなものが下敷きにある。どういものが下敷きにあるか、当てていただきたい。パロディーといわずに「本歌取り」と言っていたいただきたい。試験会場で思わず歌い出しそうになった。

[付録2 期末試験]

英語もドイツ語も相変わらず苦手で、期末試験の時はテキストと訳文を並べてにらみつけて全て暗記した。レコード盤のようなもので、教科書のある文の文頭の一語とずっと後の文の文末の一語を見ると、間の訳文がすらすらと全文言えた。むしろ、手短にまとめよと言われると困る。1回生のドイツ語の期末試験で、この手で試験問題の頭の一語と最後の一語を見て一気に訳文を書いたら何かおかしい。問題文に比べて訳文がやけに長い。冷や汗が流れたが、丁寧に見ていくと、途中の文章がごっそり抜かれていることが分かった。慌てて無い部分を抜いた訳文を作り上げて提出したが、無い部分も書いた者は皆単位をもらえなかった。

保健は川端先生（字は確かでない）の担当で、期末試験試はどんな問題が出て「川端式手洗い法」を書けば合格すると先輩に教えられた。試験に「川端式手洗い法の説明を書け」ともろに出たので書いた。もう1問は「キスでうつる病気を書け」というもので、花柳病を並べた。川端先生に後で聞くと、「空気伝染する病気は皆うつりますね」とのことであった。

試験の山が外れて「この問題はさておき・・・」と書いて自分の都合の良い問題の解答を書く、ということをして他人からはよく聞いたが、一度だけ私も実践した。西田太一郎先生の東洋社会思想史で、講義の半分を費やした孫文に山を張ったら見事に外れた。冷や汗をかきながら「この問題はさておき」と書いて孫文を高らかに論じて通して貰った。

1回生の体育は出席点だけだから100点を1つくらいは取っておけ、という高校の先輩のアドバイスで出席これ努めたのに98点であった。これはおかしいので、保健体育の先生ところになぜ100点でないのか聞きに行ったら「あ、あなたスケートの時間の時に遅刻しましたね、それで-2点です」とのこと。当時は岡崎にスケートアリーナがあって、スケートの時間だけはアリーナに行かなければならなかった。電車に乗って行ったのだが、電車が遅くて遅刻してしまった。とうとう大学では100点を1つも取ることができなかった。

2回生の時の数学C2で2時曲線分類論を松本誠先生にならった。松本誠先生は3組の担任でもあり、おうちに押しかけて酒をいただいたこともある。その期末試験の問題の中に「この曲線は有心か否か判断せよ」があった。4次の行列式を計算して答を出すのだが、試験後に「この行列式の値はいくらか」で3組が2つに割れて大騒ぎとなった。正しい答を得たものと、やっではいけない「たすき掛け」をして（正しくない）答を出したものが半々であった。私は恥ずかしながら後者に属していた。4回生の時に線形代数を1からやり直して、幸いにも今では大学で線形代数を教えている。教科書まで書いてしまった。

[付録3 サークル活動・趣味、学園祭]

サークル活動は、これも高校の先輩に引っ張られて自然科学研究会（だったと思う）に入ったが、冒頭で「デカルトの神の存在証明を原著を読んで説明しろ」と言われて嫌になってほぼ幽霊会員であった。

むしろ、3組から数学教室に上がった仲間の竹中君からの情報でクラシック音楽の演奏会に行くようになった。最初に聞いたコンサートは竹中君お勧めのピアニスト、ゲルバーであった。折しも、外山雄三氏が京都市交響楽団の常任指揮者に就任することとで、分かんなりに感激して就任演奏会のレスピーギの「ローマ3部作」を聞いた。

また、カラヤン・ベルリンフィルが大阪フェスティバルで演奏するのを食堂のテレビで見ていると、「ああ、僕の友達もかなり大阪に行ってるよ」という声が聞こえてきた。電車に乗ってまでコンサートに行くのか、と不思議な気がしたが、半年後には私も大阪のコンサートに嬉々としていくようになってしまった。

11月祭の前夜祭には模擬店が出て屋台の上で放歌高吟である。奥田東総長が屋台に登って三高寮歌を歌ったのもこの頃であった。クラブはこの模擬店で活動費を儲けようとする。したがって、模擬店はアヤシイものも多く、カレーライスなどは闇雲に前売り券を売りまくってカレーが足りなくなり、水で薄めて薄めてかすかに黄色いお湯がかかったご飯、となりはてたものもあった。探検部の「ペルーの地酒」は医学部から持ち出した純度の高いエタノールをほんの少し水で割ったものであった。それを飲んでみたが、酔っ払いもするが、未消化で腸にいたりそのまま排泄となる。しかし、人によったらショック死しかねない。怖い話しがごろごろあった。

2回生の時に、クラスでコンパ代を稼ぐためにみたらし団子の店を出した。かなり儲かるはずであったが、精算してみるとほぼ儲け無しであった。原因を分析したところ、団子を売りながらのつまみ食いが原因と分かった。儲からなかったが楽しかった。

[付録4 食事・生協・人情]

学生時代は「安いから」という理由で生協の食堂で食事をするが多かった。日曜日は西部食堂だけが開いていた。今のように「お好みコーナー」などなく、定番のおかずが作り置きで並べてあった。夏も冬も作ったおかずは室温まで冷えてしまう。冬場は石炭を焚くストーブでかろうじて暖を取り、冷め切った食事を無理矢理のどに流し込んだ。それが嫌で温かい食事の取れる学外の学生食堂に行く者も多かった。

宮崎で育ち、雪というものは降っても地面に着く前に解けて消えて無くなるものだと思っていたから、京都の底冷えはこたえた。後期の期末試験が終わって1回生の公式行事が済んでしまうと、私は心の張りを失って鬱状態になった。寒い毎日の風景が灰色に見えて意気が上がり、下を向いてため息ばかりついて歩いていた。ある日曜日、おなかはずいたので、寒い朝の早い時間であったが西部食堂に行った。開店したばかりで客は私1人であった。既におかずは凍るように冷え切っていた。焼き鯖を取ってプレートに飯と味噌汁と共にのせてストーブの近くにのろのろ行って、うつろな目をして食事にかかった。その途端、何の弾みか、プレートごとテーブルから滑り落ちた。すぐに生協のおばさんが来て、「いいからいいから」と言ってひっくり返った汁や飯をかたずけてくれた。それでも、空腹の私は朝飯も食えなくなった、と暗澹たる気持ちでたたずんでいた。そのとき、向こうで別の生協のおばさんが手招きをしているのに気づいた。のろのろそちらに行くと、おばさんが黙って私がひっくり返したものと同じものをプレートにのせて差し出してくれた。無料で食事を提供することはルール違反なのであろうが、見かねるほど私が落ち込んでいたのであろう。黙ってその食事をすませて下宿に帰った。何もかも灰色に見えていた私に人情の火が見えた。それを境に私は立ち直った。私の（今のところ）ただ1回の鬱であった。規則は人を縛るが、まだ人が規則より強かった時代のことである。

しかし、教員になって鬱になった学生と面談するときに、この経験が生きた。どうしようもなく自分の深くて暗い内面の谷底に捕らえられている者の気持ちに共感できるからである。だからといってそのような学生に何を言ってあげたら良いのか分かるわけではない。とりとめのない話しをしてあげて、相手が話したくなったらとりとめもなく聞いてあげるだけである。